匍匐前進

そもそもの始まりは洗濯機の排水のトラブルからである。

ある日、奥さんが

「洗濯機の排水が逆流しているみたいよ、ちょっと見て頂戴」

と言ってきた。

「うん、うん」と生返事をして二三日放っておいたのだが、とうとう土曜日に捕まってしまった。工具箱を片手に洗濯機の横に座り込み排水口をねじ開けた。別に詰まっているようには見えないがとりあえず排水パイプが外れないかとくるくる回していたらスポッととれた。覗き込んでみると蛇腹の受け口が見える。暗くてはっきり解らないが少し汚れているが大きなごみはない。まあ良いだろうとはめ込もうとやってみると、空回りだ。受け口が下に落ち込んでいて上のパイプのねじと三センチぐらいの差が出来ている。届かないのだ。ミシン糸で下の受け口を引っ張り上げねじ込もうとしたが引っかからない。すぐにこれはどうしようもないと理解できた。

理解できても当然解決方法は解らない。

奥さんが覗きにきて横で怖い顔をしている。

とりあえず、洗濯機の排水パイプを受け口に放り込んで、固定は出来なかったが水ぐらいは流れるようにしておいて「ちょっと用事を思い出した、外に出かけてくる。洗濯くらいは大丈夫だよ」と言ってそそくさと外出した。

その夜は洗濯機のある洗面所には近づかぬようにして、その話題にならぬように気をつけていた。

翌朝、食事の後奥さんが静かに話し始めた

「お父さん、私昨夜寝ながら考えたのだけど、あの排水口、下から手で持ち上げるより他に方法がないのじゃあない。台所の収納口から

床下に潜れるからそうしてよ」
と言ってきた。
なるほどそれしかないかもしれないな。とすぐに納得した私も単純だ。それ以後の展開を考えていないのだから。
床下の空間はざっと四十五センチ、梁のある所は三十五センチぐらいだ。
作業服に身を包んで潜り込み数メートル進んだが、腹ばいでの匍匐前進がこれほど辛いものとは夢にも思わなかった。最近体重増加でいささか腹も出っ張ってきている。靴下を履くのにも少し苦しい思いをしているのだ。しかし愚痴を言っても始まらない。荒い息を吐きながら数メートル進んでわかったことは地中梁がずっと繋がっていて、洗面所の方に行く為には玄関の方から大回りしなければならない。直線距離の倍はある。ため息が出たが今更ひくに引かれない。必死の思いで回り込み洗面所の近くまでたどり着いてとんでもない事態に遭遇した。
洗濯機の下のホースの周りはあふれた水が一面溜まっているではないか。二センチぐらいの深さはありそうである。そのまま引き返そうかと考えたが、ここまで来て何の成果も無しで帰った時の奥さんの態度を考えると、あの海の中へ突入する方がまだ耐えられそうである。それに今日はまだ暖かい方だし、死ぬほどの事もあるまい。とうとう意を決して匍匐前進だ。
体の前面は当然水浸し、じわーっと腹から冷えてくる。やっとパイプのところに辿り着き大声で奥さんを呼び下からパイプを突き上げ上から排水パイプを回してもらった。
ここでも、息が合わないのか簡単には嵌まってくれない。肩も腕も痛いしイライラして怒鳴りつけたくなるが、反撃が怖いから口の中で「何をしているのだこの馬鹿が」と罵ってみる。
五分ほど、試みてやっとうまくいった。
もうこんな場所に長居は無用だ。

急いで、帰ることにしたが方向転換だけでも大変だ。ふうふう言いながらやっと半分の距離まで帰ってきたが、そこで力尽きてそのままうつ伏せのまま休憩する事にした。

十分ほども休んでいただろうか、遠くで奥さんの声が聞こえる。さすがにあまりに遅いので心配になったのだろう。大声で返事をして又匍匐前進を開始した。

やっと元の収納口まで辿り着き、這い上がったが、濡鼠で床下を這い回ったのだから、作業服は見事に泥だらけだ。奥さんは「うろうろせずにここで服を脱ぎなさい」と命令する。その場ですっぽんぽんになり、頼んでいた風呂へ駆け込んだ。

風呂にゆっくり入りながら、考えてみたが結局私は何をしたのだろう。パイプをはずしてそれを嵌めなおしただけじゃないのか。特に詰まっていた様子はなかったが、かと言って詰まった原因は解明されていない。まあ今現在、問題は無さそうなのだが、明日はどうなるのだろう。まあ深くは考えるべきじゃないだろうと、風呂のぬくもりに身を委ねることにした。

それから一週間、わき腹の筋肉痛に悩まされながら過ごしたが、医者に糖尿の薬を貰いに行った時ついでに診てもらったら、肋軟骨炎という立派な病名を戴いた。但し老化が原因だとも言われてしまった。

排水パイプはどうなったかだって。奥さんは毎日洗濯の度に確認している。今朝も改めて見に行った。

おや、奥さんの呼ぶ声が聞こえてきた。

「お父さん、ちょっと見に来てよ」